

きちんと書けるように、 書きたいことが見つかるように

川崎晶子

現代語・現代文化学系助教授

活字離れ、メールなどの新しい媒体の出現、男女差の減少等々、最近の日本の言語環境は急速に変化している。言語は変化するものではあるが、教育機関としては日本人の一定の知的水準を保つためにも、言語教育に真剣に取り組まなければならない時代になった。

<大学での母語教育>

26年前、私は大学院生として筑波の地をはじめて踏んだ。パイオニア精神があふれていた時代で、茅葺き屋根の農家の庭に建てられたアパートから、牛小屋や蚕小屋の間を縫ってくい打ちの音が響くキャンパスへ自転車をとばした。中央図書館はまだなかった。ワープロもパソコンもなく、誤字を消す機能があるタイプライターがあこがれで、物が無い分、教官とのやりとりで学んだことが多かったような気がする。当時、学群教育では、実用的な外国語、情報処理、体育、国語

がユニークな柱として実施されていた。情報処理は今ではあたりまえになっているが、当時は最先端で格好良かった。体育は4年間必修という画期的文武両道主義で、卒論を書くときも体育があるから少しは健康維持できるという学群学生の半分負け惜しみのような感想を聞いた覚えがある。そして国語。社会言語学を専攻していた私は、ともかく母語が人に与える影響の大きさを痛感しており、大学レベルで新たに国語に取り組むという発想にいたく感激したのを覚えている。

入学してすぐその秋にアメリカに留学した。言語学科に属していたため、身近に言語教育をする人達が何人かおり、おしゃべりの合間にFreshman Englishの話は何度か聞いた。これは1年生用の英語の授業のことで、学生達は毎週作文を書かされ、真っ赤に直され、徹底的に「論旨の通った、ルールにかなった、正しい英作文」の訓練を受ける。その訓練は、

論理的思考やいずれ論文を書くときなどにとても役に立つものなのだが、新入生にとっては面倒くさくて大変なコースだと言われていた。現在では、全学生対象の教養教育の一環としてチームを組んで取り組んでいる大学、一般の授業でレポートの書き方の指導をする科目を英作文として認め柔軟に実施している大学、と多様化しているようだが、母語を大学で再教育する必要がある、という認識は変わっていない。これは義務教育が低迷し基礎学力が低いまま大学に入学する学生の多いアメリカの特殊事情があるかもしれないが、もう一つ、教育程度の高い人間の証の一つとして、日常のおしゃべりとは違うレベルの言語使用を習得する必要がある、という考えがあるからである。

現在の筑波の学生を見ると、やはり母語の再教育、大学生としての日本語力の育成は必須であると思う。特に、日常のおしゃべりとは違うレベルの日本語の指導と、書いたり発言したりするときの基本的態度の養成という2つの点でその必要性を痛感している。

<現代若者言語環境>

毎学期たくさんのレポートを読む。年々唖然とするようなレポートの割合が

増えている。たとえば、段落もなく、思いつくままの文が延々とリストのように並んでいるもの。私に口語で語りかけてくるもの。書き手の感性だけに頼った感覚的なことばが並ぶもの。一応の体裁が整っているものでも、各所でおしゃべり言葉が文章に混じる。

日常生活の中でフォーマルな場が激減している現在、口語と文語の差やフォーマルな場の捉え方に変化が起きている。以前は、書くことはフォーマル、文語を使うものと意識されてきたが、現在の若者にとって書くことと言えば携帯メールを打つことという状況も珍しくなく、その携帯メールは口語で打つものという認識がほとんどである。他に学生が「書くこと」となるとノートをとることがあげられるが、観察してみると授業中にノートを取らない学生も多く、また、早口の大量の情報から要点をノートに書き取るという作業そのものができない学生も少なくない。そのような状況下で、突然学期末にレポートを書くことになるが、その書き方の細かな指導はあまりされていない。良く書けた書物や論文をいくつも読んでいればレポートの書き方は自然と体得できるはずだが、インプットそのものが少ない。本を読まない。情報収集という点では新聞を読む必要もなく、目に

する活字は気軽な雑誌程度で、語りかけるように書かれた文章に共感する。そうなると、口語と文語の差に気づくチャンスもあまりないことになる。

若者の言語環境を見直してみると、きちんとした堅い文章がどのようなものがあるのか、文体の差や書き方そのものを知るチャンスそのものが減っている。現在の筑波の国語教育の現状を把握していないが、初期の筑波の共通科目に対する気概を引き継ぎ、世に先駆けて現代の若者向け母語再教育、今必要な日本語力の育成をユニークに展開して欲しいと思う。

〈広義の言語教育〉

演習やゼミで、日常の中に社会言語学や人類言語学的话题を見つけ、調べ、書くという作業をやっている。そこで最も困ることは、トピックが見つからない学生が多いということである。講義を聞いておもしろい分野と思ったから演習やゼミに参加してきているのだろうが、さて自分自身の話題を見つけるとなると止まってしまう。分野が分野だけに、日常生活を見渡せば研究課題はそこそこに転がっているのだが、自分の目で物を見ること、いわゆるクリティカル・シンキングがなかなかできない。

「身近なところでおもしろいと思って

いることない?」「なぜおもしろいのかな?」「それって、社会言語学でいう〇〇ということにつながるんじゃない?」と徐々に学生の中にあるものを引き出していく。テーマが決まって「じゃ、それやります!」とにこにこ顔の学生を見るのはうれしいが、そのあとの指示待ちの態度にちょっと失望する。どう処理しているかわからないのである。「だれかそのこと研究しているんじゃない?」とそれについての研究、データ等がどこにあるかを探すことを期待するが、その探し方は手取り足取り手ほどきする必要がある。最近の傾向は安易なインターネットの検索で、その結果を印刷して調べた気になる。主要な参考文献の近くを歩き回らざるを得ないようなチェックリストを盛り込んだ「図書館オリエンテーリング」を工夫し、本の請求番号を書かせたり、チェックにかかる時間を競わせたりして、開架式で長時間開いている筑波の図書館の良さを実感してもらおう。次は、情報の整理と出所のチェックである。出典をメモするという発想もないのが普通なのでそれを指導しながら、各自の分類を加えた「注釈付き文献目録」など作り、調べたことを自分の目で整理してもらおう。ここでやっと、自分の視点で選んだトピックを考える下地ができる。

「こういうことを調べたい」「じゃ、どう
いう方法でそれが見えてくると思う？」
教え込まないで自分で考えるようにしよ
うとすると時間がかかるが、学生にはそ
れが必要だと確信している。半年も経過
し、自ら考える態度が少しでも身につ
てくると、話すことにもその効果は現
れ、授業中の発言が増え、選んだトピ
クの大家になったような自信に満ちた発
言をする学生がでてくる。まずは一安
心。次は、調査をして発見したことを、
自分はわかっているが読む人は何も知
らないのだということを口を酸っぱくし
ながらくり返し、他人にわかるように書
いてもらう。ペアを作りお互いの初稿を
読みあって、わからないところを指摘
しあう。赤と青のペンで、自分の意見
と他人の意見、引用部分などが明確に
書き分けられているかもチェック、正
しい情報の提示のしかたを試行錯誤で
学んでいく。最後までついてくる学生
は半数程度。自分の発想を表現でき
ようになった学生には、初心にもど
って、人の話を聞ける態度の養成に
はいる。カメの歩みの教育現場であ
る。そして、これは広い意味での国
語教育ではないかと思はし。

キュラムの見直しをしている。英語の
授業を通して学生に身につけてほしい
ことを列挙していった結果、一般的言
語力（話す事、聞く事、読む事、書
く事、辞書やインターネットの利用）、
社会での運用力（自己表現、場にあ
った適切な発言）、基本的思考力（
自律的批判的思考、論理的思考、寛
容な思考、地球規模の思考）、異文
化コミュニケーション力（多様な価値
観やコミュニケーションスタイルに
対する理解）、研究力（目的設定、
実施、分析、考察）、発表力（構
成、形式、文体、効果的論述）、自
学自習力（目標設定、計画、実行、
見直し）などがあがった。さまざま
なクラスの、さまざまなレベルの英
語の授業で担当者が授業を通して学
生に身につけてほしいと思ってい
ることの集合である。対象言語は英
語だが、いい学生になるための共
通項目がたくさん入っている。そし
て、国語も英語もゼミも演習も学
生にとってはちゃんとした大学生
になるための全人的な教育なのだ
とつくづく思う。

（かわさきあきこ 社会言語学）

<国語力、思考力、研究力、発表力>

最近外国語センターで英語教育のカリ